

1970年概要
81

沿 革

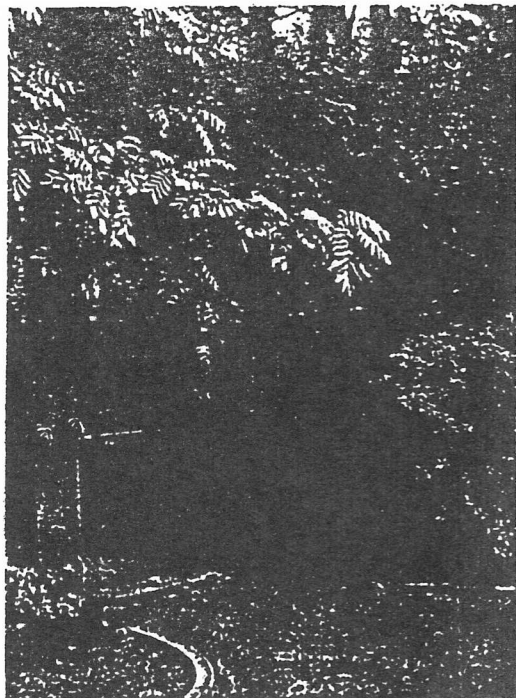
理学部附属植物園は、1923（大正12）年4月に開設された。植物学教室創設当時の郡場寛教授は、植物園を単に珍しい植物を集めた栽培園ではなく生態学的特色をもったものにしよとの構想のもとに建設をすすめた。現在地が予定地として選ばれたが、ここは白川の扇状地に位置するために土壌の母材は花崗岩の風化した白川砂であり、種々の困難が生じた。しかし、上の構想に基づいて計画はすすめられ、大小2つの池が掘られ、その土で小山が作られ、また、岩山、洞穴、砂丘なども計画的に配置されて、異なったいくつかの生活条件が人為的につくられ、生態植物園の基礎がきずかれた。

この環境条件を利用して、当初、井上清三郎技能員、三木茂助手らが中心になって、系統分類学上の類縁と、生態学的見地からみた各種の植物集団の育成とを考慮して、国内、国外から集められた植物を配置・育成した。

郡場教授退官後は、小泉源一教授、北村四郎教授らによってひきつがれて、日本産植物に加えて中国・琉球産植物が数多く集められ、水槽には新家浪雄教授らによって貴重な水生植物（藻類・羊歯類を含めて）が集められて、小さいながらも特色をもった生態植物園として整備充実されてきた。室戸台風をはじめとする台風によって数回にわたって相当の被害を受けたことや、面積が狭小なための困難もあったが、本植物園は植物学の研究と教育を継続的に遂行するのに重用されてきた。さらに、動物生態学、動物発生学、昆虫学、森林生物学、造園学、生薬学、木材化学などの理学部、農学部、薬学部、工学部にわたる各分野の研究と教育にも広く利用され、他大学、民間研究所などにおける研究の材料供給にも大きな役割を果たしてきた。

本植物園に関連してなされた研究業績は従来植物学教室から発表されたが、植物生態研究施設に移管されるまでの最近15年間に、58編に達する。それらの中でも水田の微細気象に関する研究は世界最初のものである。

1925年から1943年の間に、植物園北側の一帯が少しずつ農学部の管理に移され、1934年に東南隅に官舎が建てられた。1953年、1960年に湯川秀樹教授のノーベル賞受賞記念の基礎物理学研究所が西北隅に建てられ、1963年からこの南側に数理解析研究所建物が新営された。これらのため植物園の有効面積はかなり減少した。



大正12（1923）年4月
昭和39（1964）年4月

理学部植物園開設
理学部附属植物生
態研究施設開設
植物園は同施設に
移管

特色あるコレクション

° 印は温室内

外国産針葉樹

メタセコイア (アケボノスギ) 1941年に三木茂によって日本産の化石種に基づいて絶滅した属として発表され、1943年に中国四川省で生きている個体が発見されて「生きている化石植物」と世界の注目を浴びた。米カリフォルニア大のチェイニーのもとで育てられ1950年に日本に最初に送られてきた3本の苗のうちの1本がある (他の1本は皇居にあるという)。挿し木でよく増え、当園からも全国に苗が配られた。学校などによく植えられている。最初の1本は2回植え替えられたために成育が悪く、現在は2代目の木の方が大きくなっている。

セコイア 北米西部に生え高さ100m、直径8mにも達し、世界で最も高く成長する木。日本でも鮮新世のころの地層に遺体や石炭化したものが多く含まれている。

ヌマスギ (ラクウショウ) 北米南東部の川沿いの低湿地に生える。水底の根から呼吸根を直立させる。

琉球の植物 主に小泉源一によって収集されたもの

チシャノキ、マルバチシャノキ、ヤエヤマシタン°、オオカナメモチ、フシノハアワブキ、オヒルギ°、メヒルギ°、アカギ° など

中国の植物 小泉源一、三木茂によって収集されたものなど

セッケンノキ、トウサイカチ、エンジュ、シナレンギョウ°、ツバキ類、コバタゴ、ニッケイ、ムラサキイヌグス、チャンチン、フウ、ボダイジュ、シナサワグルミ、ヤハズホオノキ、シナユリノキ、トチュウ、シナアブラギリ、ナンキンハゼ、ハクショウ、スイショウなど

ヒマラヤの植物 中尾佐助やその後の調査隊によって採集されたもの

スミストウヒ、ヒマラヤゴヨウ、トゲガシ°、チャンチンモドキ、クスソハカエデ°、ヒメシャリントウなど

タケ類 おもに竹内叔雄のコレクションからなる。洛西の竹林公園などに株分けされたものもある
トウチク、シホウチク、カンザンチクなど ホウライチク今年開花した

日本の植物 北村四郎・村田源ほか著『原色日本植物図鑑 (草本編、木本編)』の図に多くの種が描かれた

ユクノキ、ムクロジ、モクゲンジ、バナノキ、ヒトツバタゴ等の比較的珍しい種が大木に成長している
アイラトビカズラ°、ヤマコンニャク

比較生態学的研究の対象として

ササ類 数十年に一度一斉に開花し種子を落として枯死する、特異な生態の研究が行われている。種子から育てた実生が植えられている。イブキザサ-1977年、比良山 チシマザサ-1989年、八甲田山
ギボウシ属、ミツバツツジ類、タデ科、スゲ属、カバノキ科、クスノキ科、モチノキ属
水草 大賀ハス-千葉県検見川の2000年前の地層から大賀一郎によって発見された種子から発芽したもの。巨椋池のハス・クログワイ、ヒシモドキ、ミズニラ、タヌキモ、ミツガシワ、など



樹冠の生態学 葉の分布、花と昆虫の関係、果実と鳥の関係など、樹木の生活の主要な部分が行われている樹冠に登って直接見る研究が行われている。樹冠に安全に達する方法の練習ができる。

菌類 キノコと植物、動物との関係の研究が行われている。横山和正によると当園内で81属155種のキノコが記録されており、この中には新種数種、日本初記録種多数も含まれている。

池 疎水の水を引く。水生昆虫の生態の研究が行われている。この池を掘ったときの土で小山が作られ、その頂上にはその時出土した多数の石仏が置かれている。

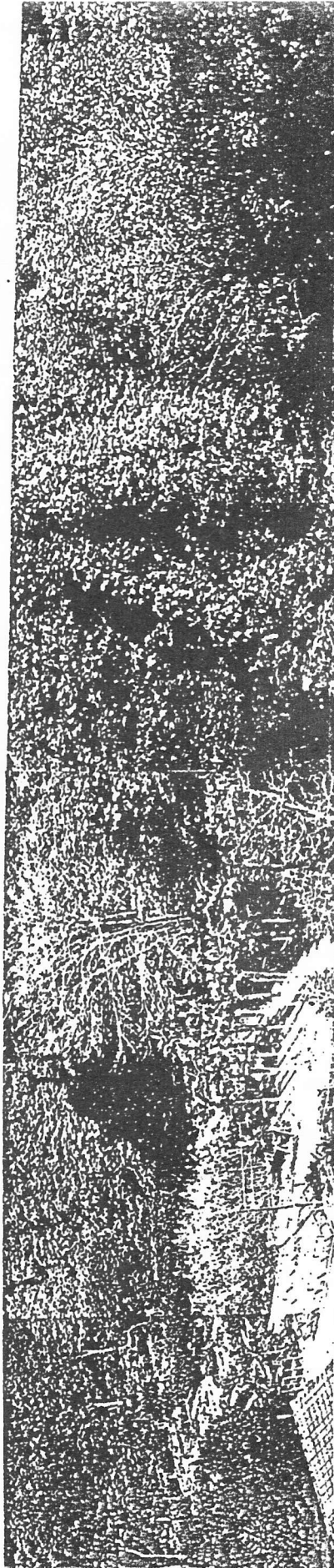
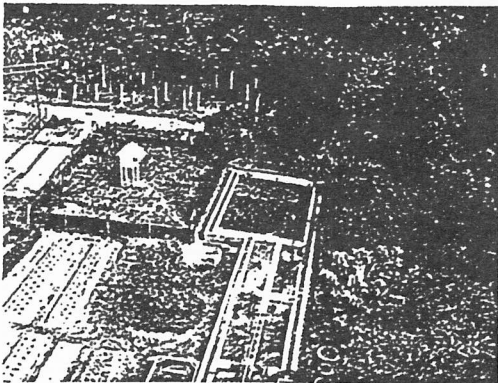
遺跡 1973年、建物の建設中に、縄文時代後期初頭 (約3000年前) の甕棺墓、配石墓が発掘された。旧白川の段丘上に営まれた縄文人の生活を伝える遺構である。

京大植物園の鳥リスト

- | | |
|------------|-------------|
| ×カイツブリ 留 | △ウグイス 留 |
| ○ゴイサギ 留 | ×メボソムシクイ 通 |
| △コサギ 留 | ×エゾムシクイ 通 |
| △アオサギ 留 | ×センダイムシクイ 通 |
| △カルガモ 留 | ×キビタキ 通 |
| △トビ 留 | ×オオルリ 通 |
| ×ハイタカ 冬 | ×サメビタキ 通 |
| △ユリカモメ 冬 | ×エゾビタキ 通 |
| ○キジバト 留 | ×コサメビタキ 通 |
| ○ドバト 留 | ○エナガ 留 |
| ×ホトトギス 夏 | ○ヤマガラ 留 |
| ○アオバズク 夏 | ○シジュウカラ 留 |
| △フクロウ 留 | ○メジロ 留 |
| △カワセミ 留 | ○アオジ 冬 |
| △アオゲラ 留 | △アトリ 冬 |
| ○コゲラ 留 | ○カワラヒワ 留 |
| ○ツバメ 夏 | ○イカル 留 冬増 |
| ○キセキレイ 留 | ○シメ 冬 |
| △ハクセキレイ 冬 | ○スズメ 留 |
| ○セグロセキレイ 留 | ○ムクドリ 留 |
| ×サンショウクイ 通 | ○ハシボソガラス 留 |
| ○ヒヨドリ 留 冬増 | ○ハシブトガラス 留 |
| △モズ 留 | |
| ○ジョウビタキ 冬 | |
| ×トラツグミ 留 | |
| △アカハラ 通 | |
| ○シロハラ 冬 | |
| ○ツグミ 冬 | |

○普通に見られる	留 留鳥
△時々見られる	夏 夏鳥
×稀に見られる	冬 冬鳥
	通 通過鳥

観察記録をお知らせ下さい。



(附圖) 植物園見取圖

